

匪賊と共に

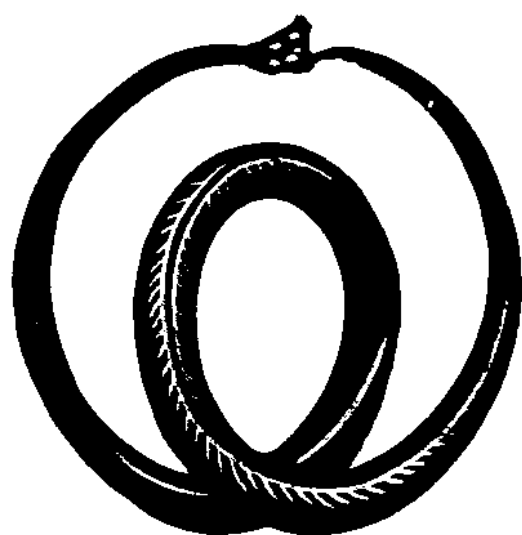
三上綾子



匪 賊 と 共 に

チチハル脱出記

三 上 綾 子



東 京

株 式 会 社

第 二 書 房

1956

三上綾子

大正11年4月、岡山県に生まる。岡山高女中退。
昭和17年春、渡瀨。齊々哈爾の叔母の家に養女とな
る。昭和21年11月、内地帰還。現在、新見市にて旅
館の仲居を勤む。独身。

昭和32年1月15日	第8刷	2000部発行
昭和31年12月31日	第7刷	2000部発行
昭和31年12月25日	第6刷	2000部発行
昭和31年12月15日	第5刷	2000部発行
昭和31年11月30日	第4刷	2000部発行
昭和31年11月20日	第3刷	2000部発行
昭和31年11月15日	第2刷	2000部発行
昭和31年11月10日	第1刷	3000部発行

著作者 三上 綾子 刊行者 伊藤 禎
印刷所 東京都新宿区築地町13 赤城印刷株式会社
刊行所 東京都世田谷区北沢1丁目1175

株式会社 第二書房
振替口座 東京8957 電話(42)5462

定価 150円

目次

1	大陸の田舎街	7
2	敗戦の日	9
3	魯毛子 ^{ロモリス} 来る！	14
4	全裸の奥様	22
5	辻斬事件	28
6	隊長への抗議	34
7	秋のおとずれ	48
8	中佐と満妻	55

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
脱走の計画……………	殺された日蓮信者……………	口うつしの湯……………	腹部の烙印……………	匪賊の巣窟……………	チャンバに乘せられて……………	見破られた男装……………	乳房を握られて……………	良人の眼の前で……………	賄賂の効果……………	齊々 ^{チチ} 哈爾 ^{ハル} よさようなら……………
148	134	128	118	113	109	95	86	74	66	61

20	太縄で首を……………	158
21	女教師の勇姿……………	168
22	首領の家……………	178
23	密林を抜けて……………	188
24	馬上の接吻……………	194
25	生爪を剥がされる……………	198
26	斃れゆく狂女たち……………	206
27	厠で聞いた噂話……………	214
28	梅毒菌の恐怖……………	221
29	北満の五月空に……………	228
30	支那服を着た女……………	236

匪賊と共に

——チチハル脱出記——

1 大陸の田舎街

ハルビンから満鉄本線で八時間ばかり、大きくゆるやかなうねりを見せて、涯しなくつづく曠野の中を、北東へ横切ると、昂々溪コウコウケイに着く。本線はさらに、海拉爾ハイラル、滿洲里マンヂュリへ向うが、昂々溪コウコウケイから齊北線サイペクに乗換えて約二十八キロ、そこに齊々哈爾チチハルがあった。むかしは、馬占山將軍の本拠地であり、当時は、緑林族伝統の陰謀と暗殺に、街は陰気な無気味さが漂っていたという。そのせいか日本軍の治政下になって、そうした事件も一掃され、表面はまことにのんびりとした風景は見せているものの、永く住みついてみると、眼に見えない、変に肌寒いものを感じる街だ。けれど、一見は、曠野の孤島ともいえるこの街は、大陸の田舎街といったたまたま、まいだった。

齊々哈爾チチハル駅はクリーム色の四階建の近代建築だが、裏手はすぐに見渡す限りの高粱畑コウリヤン、その中に黒煉瓦の農家が、ぽっんぽっんと、点在して見える。駅前正面は、広場につづいて十二間幅もあろうかアスファルトの大通りが一直線に西へのびて、市内で一流の、竜江ホテルへぶつかる。むろん電車などうごいてはいなかった。だから女の足だと、竜江ホテルまで三十分はたっぷりかかる。馬車が唯一の交通機関だった。もっとも、軍の関係や公社関係の人たちは自動車を走らせ

ていたけれど――。

ところで、駅を出ると、まず、右手にある派出所から、のどかな情景が展開される。この満洲国の警察官たちは、それが当然のように、いつもこっくりこっくり、居睡りをむさぼって、それがまた、街の絵の中にしっくりととけこんで、すこしのおかしさもうつらないのだ。なにしろ駅前から一キロほど、人道に沿ってプラタナスの並木を植込んだ大通りの両側は、人家のほとんど見られない原っぱだった。早春には薄紫の迎春花^{インチュウホア}が、晩春から夏へかけては野生の芍薬^{しゃやく}やタンポポ、ライラックなどが、美しい色どりで咲き乱れた。

やがて人家が、ぼつぼつと疎^{また}らに目につくようになって、これがまた一キロばかりつづくと、ようやく賑やかになる。この附近から市街になるわけだ。そして、緑の屋根が竜宮式の支那色豊かな、それでいて、建物自体は古風な洋式の二階建の、ちぐはぐな構成の竜江ホテルの前で、道路はT字型に左右にわかれる。道路幅も八間ほどにせばめられて、左は、アカシヤの並木のアスファルトが昂々^{コウコウ}溪々^{セキセキ}通じている。日本人は大体、この道の左側に、下町といわれる日本人街の一劃をつくって住んでいた。それで、右側には、日本人小学校があり、忠魂碑を祀^{まつ}った齊々^{チチ}哈爾^{ハル}神社、日本人女学校、さらにゆくと、日本軍将校の家族たちの住んでいた南部官舎などがある。私の叔母も、この下町で小料理屋を営んでいた。

T字型の右は、当時の満洲国の警察、中央銀行、竜江省の建物など、さらに、城内と呼んでいる満人街へ通じて、主に満人が生活をしていた。

つまり、T字型の左と右に、日本人と満人が、しぜんと色わけをされていたようであった。

これが敗戦前の、齊々哈爾チチハルの街のようすである。日本人は、この大陸の田舎街に、どっしりと腰をすえて、田舎者らしい安住の満足で、ここを永住の地ときめこんで、おっとりとして暮らしていたように思われる。

2 敗戦の日

昭和二十年七月、ソ連参戦の一ヵ月前だ。後宮淳大將は、麾下の第三方面軍司令部と奉天に移駐。後には、防衛隊司令部といかめしい名前を掲げてはいるものの、歩兵、砲兵、工兵など、直接戦闘に当る部隊は、すべてゼロ！ その実体は、兵器廠、自動車修理廠、憲兵といった地上軍関係の附属部隊と、それに航空軍関係の附属部隊の、およそ防衛には縁のうすい防衛隊が誕生した。それもいわば寄り合い世帯。齊々哈爾チチハル防衛隊の、各部隊の連絡や統率は、きわめて困難であったといわれている。

それが、八月九日、ソ連参戦と同時に、醜態をさらけだした。軍人家族の避難列車の争奪戦が始つたのだ。彼等は、各部隊毎に一団となつて、いち早く停車場へ押し寄せたが、南下してくる列車には、すでに国境方面からの大移動で、兵器、機械、軍需資材が満載されていた。便乗の空席がなかった。それだけに、真剣であり深刻だった。ちよつとでも乗り込めそうな場所でも見つけようものなら、わしの部隊が先きだ！ 何をいうかつ、わしの家族を先きにせんか！

将校同士、撲り合いまで演じるしまつ。

けれど、避難出来たのは高級将校の家族だけで、少佐以下の家族の大半は、ついに残留を余儀なくされたのであつた。軍人家族すらこのありさまでは、一般民間人はむろん、満鉄関係の家族でも、齊々^{チチ}ハ爾^{ハル}を脱出した者は、おそらく一人もいなかったのではないだろうか？

軍の醜態は、停車場だけではなかった。ソ連開戦直後、満人に不穩の気配がみえると、あわて、軍人家族を官舎から部隊の中へ移したのだ。だから十五日の休戦をまたずに、官舎内に残置した家財道具の一切は、一品余さず満人の掠奪に遭つたのだつた。

ところで、街の人は、一ト口に一万七千人在住といわれた、齊々^{チチ}ハ爾^{ハル}の日本人たちは、このよ
うな軍の狼狽ぶりに、さすがに不安の動揺をみせはじめた。うちをたたんで、内地へ引揚げる相談が、真剣にかわされだした。だが、まさか、こんなに早く日本の惨敗になろうとは、だれ一人

として予測もしなかったに違いない……。

八月十五日。この日正午、重大放送があるというので、私の家の者は、みんなラジオの前へ集った。叔母と私と、お座敷の女のひと五人の、女ばかりの世帯である。陳さんもいらっしやい、
と、通いのコックで満人の陳さんも呼んだ。男は、この陳さんだけで――。

ところが空間状態が悪いせいか、ラジオはガアガアガサガサ雑音がひどくて、流れてくる陛下のお声がなかなか聞きとれない。けれど放送の内容のタダゴトでないことは感じとれた。みんな耳をすませる色になった。放送は数回にわたって、くりかえされた。やっと、ポツダム宣言受諾、休戦の御詔勅とわかる。えっ？ となった。不敗を誇る日本の惨敗が信じられないような、三年八ヵ月にわたる永い戦争が終ってほっとしたような、それでいて、ただ無性に胸が迫ってくる。

だれも、黙然と、おしだまっていた。やがて叔母が、唇を噛んで、嗚咽を洩らした。と、急に悲しみが堰を切って、みんな、泣いた。深い悲しみの底で静かに泣いた。嗚咽にむせびながら、肩をふるわせていたのだった。

ようやくに嗚咽がやむと、こんどは虚脱の中で沈黙の時間が流れた。暗然とも茫然ともつかない

い顔で、みんないゝんとなっている。一体このさき、どんな運命が用意されているのだろうか？
日本人はどうして暮すのかしら？ 私は、うつろな頭の中で、そんなことをばんやりと考えていた。

休戦の放送を中心に市内は騒然と変貌していったのであった。満人の危険から部隊内へ避難していた軍人家族は、こんどはソ連軍の入城を顧慮して、軍人会館と、宮前小学校へ分割収容された。満鉄の従業員家族は、駅前右手の原っぱの中に庁舎を構えて住んでいたが、この附近は満人の暴動が起りそうだと、急いで市内の、満^{ます}寿^す花^{はな}、よしの屋、千^ち歳^{とせ}など、大きな料理屋へなだれこんでいった。それというのも、満軍の鉄道警乗隊司令官の某満軍少将が部下に虐殺されて、その屍体が齊々哈爾駅前へむごたらしく放り出されているという事件に、緑林族の残虐性をまざまざと思い知らされたからだ。それに事実、無頼の満人が徒党を組み、兵器廠から機関銃を掠奪する事件もあって、危険な事態は眼に見えて迫りつつあったのだ。

一方、日本軍人の中には自決する者が多くなっていった。初めに、防衛司令部副官上野少佐夫妻が、乃木大将夫妻を偲ばして、自宅官舎で従容として割腹自殺をとげる。ついで第三方面軍残留司令部の、若い某少佐が拳銃自殺。幹部将校の自決は部下を刺戟した。第十七航空情報隊の小野初美軍曹は、挙動の不審から、部隊長が固く離隊を禁じていたが、ついに齊々哈爾神社へぬけ

だと、小銃の銃口を口にくわえ、足で引金ひきがねを押した！ 忠魂碑の裏であつたという。また、純情一途な十七、八歳の特別志願兵の多くは、いたるところで手榴弾を投げつけ、肉片を飛散させて自決をした。横も縦も、連絡のとだえた曠野の孤島——齊々哈爾がかもしだす悲劇であつた。

ところが、街に朗報が飛んだ。ソ連の少佐が飛行機で来て、日本軍と折衝、齊々哈爾の警備は従前どおり、日本軍隊がこれに当るといふのだ。とすると、ソ連軍は来ないのかしら？ 来たところで将校ぐらいかも知れない？ まあともかく、心配するほどのことはなさそうだ？

「ソ連は共產主義の国なんですもの、そんなにヒドイことはしませんわ、きっと！ かりに危害を加えたら、そのときは、そのときですよ、奥さん！ いっそのこと死んだっていいんだし……まあ、ようすを見てみましょうよ、ねえ奥さん！」

といった調子だった。真実、街の要処要処には日本の憲兵が警戒に立って、心配した満人の暴動も影をひそめていたのだ。市内は、陰険な空気を孕みながらも、無気味な平静を保っていた。

どうやら、このぶんだと何事もなさそうだ、と思う反面、やはり何んか起りそうな、落ちついていてよいものやら、悪いものやら、ソ連軍の入城にも何か心に期するものがあるような、そのくせ何んだか不安みたいで、えたいのつかめないモヤモヤした空気が、ここの市民全体の心を支配していたように思われる。

3 魯毛子来る！

八月十九日、ソ連軍入城！

昂々溪コウケイからの道路を、戦車部隊を先陣に歩兵を乗せたトラックが驀進して来た。街の人は、道路の両側に立ち並んで、好奇と不安で、これを見守ったのであった。騒々しい音を立てながら走る戦車には、岩のようにゴツゴツした大きな体躯のソ連兵が、単色の軍服の肩から胸にかけて、円るい弾倉のついた自動小銃を抱えていた。トラックの歩兵は、みんな灰茶色の軍服だ。小銃の先の、錐みたいに尖った剣が、見馴れない鋭い剣が、キラキラと陽に光って、ぞくつとするほど無気味だった。

ソ連軍の入城と交代して、日本兵は市内から姿を消す。あつという早業であった。日本の部隊は全員武装を解除されると、旧野砲隊と兵器廠へ収容されたのである。話によると、初め日本軍は強い抗議で、齊々哈爾は従来どおり日本軍隊が警備に当たるといふ協定のもとに無血入城をゆるしたのだ！と。ところが入城して来た司令官の大佐は、その協定は認められん！第一、協定を結んだ相手は少佐ではないか。わたしは大佐だ。少佐の指令で大佐の行動は束縛されん！と